

コリント人への手紙第二12章7-9節 「弱さの中の力」

1A 肉体のとげ 7-8

1B 痛み

1C 継続的

2C 不自由な身

2B サタンの使い

1C 「神の呪いだ」

2C 「お前も神を呪え」

3B 主への祈り

1C 取り去ることの願い

2C 聞かれない願い

2A 十分な恵み 9

1B 聞かれている祈り

2B 主の恵み

1C 主の好意

2C 人のへりくだり

3B 弱さの内の完全な力

1C 自分の無力

2C 神の力

4B 弱さの誇り

本文

コリント人への手紙第二 12 章を開いてください。今朝は、12 章 7-9 節を読みます。「⁷ その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンの使いです。⁸ この使いについて、私から去らせてくださるようと、私は三度、主に願いました。⁹ しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

今日の箇所は、コリント第二における、最も中心になる言葉であり、イエス・キリストの福音の深い部分、精髓に触れる箇所です。主の恵みが、私たちの弱さ、肉の弱さの中で十分に明らかにされる、ということです。

この主のことは、すべての、安価な宗教を打ち壊します。あなたの苦しみ、悲しみは、あなたの何かがあるからだ、彼らは教えます。祝福というのは、すべての苦しみがなくなることで、そのためにあなたは、これこれのことをしなければならない、と教えます。確かに、すべての苦しみは、聖書も、アダムが罪を犯した時から、土地から茨とあざみを生えるようになったと教えます。しかし、罪によって世界に苦しみが入りましたが、その苦しみの中にあっても、神の恵みが十分にある、主の力が、その弱さの中に完全に現れるのだということです。主は、再び来られて、いずれ、これらの苦しみをすべて取り除かれます。しかし、今、苦しみのただ中にいる人々に、恵みを示して下さい、その弱さの中にご自分の力を現わしてください。

人の救いとは何なのか？ということ、思われますね。私たちは、自分たちで何かできるという高慢を、心の奥底で抱いています。救われるという時に、自分でできないことをできるようになるということで考えてしまいますが、聖書はもっと深いことを教えています。十字架の上でイエス様の隣に、二人の罪人がいましたが、一人は、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え。」と言いました。しかしもう一人は、「イエス様、あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」と言いました(ルカ 23:39-43 参照)。同じ「救われる」といっても、今の苦しい状況から救われるということ以上の、救いを神は恵みによって用意しておられます。それが、しばしば苦しみの中で与えられるのです。

星野富弘さんのことを思います。彼は、体育教師でしたが、体操部の指導中、宙返りの模範演技で、頸髄損傷の重症を負い、肩から下の機能が麻痺しました。9年間の入院生活の間に、口にくわえた筆で、絵画を始めました。それから、誌を添えるようになったのです。それが、「花の詩画集」を始めとして、全国のみならず、世界各地で詩画展が開かれます。彼の言葉には、何をもちて救いなのかを、鮮やかに教えてくれます。それは、神によって生かされているという恵みに立ち帰ることです。自分は自分の力で生きているのだという高ぶりを打ち砕かれ、本来の人間の姿、神のかたちとしての姿に立ち戻る事ができているとうことです。例えば、次の言葉があります

「過去の苦みが、
後になって楽しく思い出せるように
人の心には
仕掛けがしてあるようです。」

「川の向こうの紅葉が
きれいだったので
橋を渡って行って見た

ふり返ると

さっきまでいた所の方が
きれいだった」

「冬があり夏があり
昼と夜があり

晴れた日と
雨の日があつて

ひとつの花が咲くように

悲しみも苦しみもあって
私が私になってゆく」

「神様がたった一度だけ
この腕を動かしてくださるとしたら
母の肩をたたかせてもらおう。」¹

一つ一つが、もし体が健常であれば、気づかなかったことです。しかし、人が人として生きるため
にかけがえのないことばかりです。その、神のかたちとしての人の姿、人間性を失っているのが、
私たち人間の姿です。肉体における苦しみを通して、そこに立ち帰る恵みを、神は下さいます。

1A 肉体のとげ 7-8

7 その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。
それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンを使いです。

パウロ、「肉体のとげ」について話しています。それが、一体なんであるか、いろいろな議論があ
ります。けれども、パウロが敢えてそれを特定していないのは、目的があるのでしょう。つまり、パ
ウロの具体的な肉体の痛みは、私たちの受けている苦しみのいろいろな部分に当てはまるという
ことを示しているのでしょう。肉体の痛みだけではなく、精神的なこともあるでしょう。自分にとって、
やっかいなこと。非常な不便を強いられていること。どうしても避けたいこと。それらが、襲いかか
ってきている状態です。

1B 痛み

ちなみに、この「とげ」であります。ちくりと刺すような小さな棘のことを話していません。ギリシ
ア語では、杭(くい)というようなニュアンスがあります。自分の身体に、杭が刺さっているようなイメ
ージです。棘が刺さっているだけであれば、痛みはありますが、日常生活にちょっと不便が伴うだ
けです。けれども、杭が刺さっているような状況では、いわゆる身体障害です。

1C 継続的

そして、この痛みは継続的なものです。どんな激しいものでも、一時のものであれば耐えられま
す。私は、しばしば、自分の足の指を柱の角などにぶつけて、全身に痛みが走りますが、一日た
てば、もう忘れていきます。けれども、この、肉体のとげは、24 時間、いつになっても続いているもの
です。絶えず、いつまでも付きまとっているのです。忘れることができないのです。

2C 不自由な身

そして日常の当たり前に行ってきたことができないという、不自由が与えられています。先ほど
話したように、これがパウロの何を指しているのかに、議論がありますが。その中で、目がよく見え
ないというのがあります。ガラテヤ人への手紙で、その人々がパウロに、自分の目を抉り出して

¹ <http://earth-words.org/archives/7977>

与えたいほど、愛していたことが書かれていますし、手紙の最後の挨拶で、口頭筆記に頼らず、自ら書く時に大きな文字で書いています。なので、目が悪くなったということかもしれないと言われます。パウロにとって、それは、聖書を読むことがなかなかできないという苦しみだったでしょう。福音宣教をしている、また神のことばを教えているのに、巻き物に書かれているものを読むことが、普通の人々より時間がかかり、かなりの神経を使うのは容易に想像できます。

2B サタンを使い

そして、このとげが、「私を打つためのサタンの使いです」と、パウロは言うのです。これは、一体どういうことでしょうか。これは、同じようにして、主のしもべが、サタンによって試みを受けた時のことを思い出せばよいでしょう。サタンによって、肉体の痛みを受けたと言ったら、そうです、ヨブです。主が、サタンが、彼の財産と子供たちに触れ、そして体に触れるのを許可されました。

1C 「神の呪いだ」

サタンの目的は、こういうものです。「ヨブは理由もなく神を恐れているのではない。神が、ヨブの周り、すべての財産の周りに垣を巡らしている。彼の手のわざを神が祝福しているから、主を恐れているのだ。」ということです。だから、財産に触れたら、彼は神を呪うに違いないということです。つまり、サタンがまず私たちに行くことは、「神は良い方ではない。意地悪な方だ。」とそそのかすことです。神は、祝福するのではなく、私を呪うのだ、と思わせることです。そそのかすことです。パウロが、今、肉体のとげを受けていて、それで、自分が神に呪われているのだ、見捨てられているのだと思わせることです。

2C 「お前も神を呪え」

次に、自分も神を呪えばよいと、そそのかしています。その手にまんまとはまってしまったのが、ヨブの妻です。彼のからだが重い皮膚病で蝕まれ、土器のかけらで、からだをひっかいて、灰の中に座っていた時に、妻が、「あなたは、これでもなお、自分の誠実さを堅く保とうとしているのですか。神を呪って死になさい。」と勧めました。ヨブは、「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。」と言いました(2:7-10)。その苦しみの中で、神を呪うようにサタンが誘います。

サタンは、とりもなおさず、私たちが神から引き離されることを願っています。自分が永遠の火の中に投げ込まれることを知っているのです。なるべく道連れにしたいのです。神がご自分のかたちに私たちが造られ、キリストにあってご自分のところに引き戻したその働きに、傷を与えたいのです。ですから、サタンの使いは肉体のとげにおいても、私たちを引き離すべく、そそのかします。パウロも、そのような、サタンの囁きを、この肉体のとげを通して聞こえていたのでしょう。

3B 主への祈り

そのような中で、パウロは、サタンの使いによる囁きと戦いながら、この肉体のとげについて、取

り去ってくださいと願っています。

⁸この使いについて、私から去らせてくださるようと、私は三度、主に願いました。

1C 取り去ることの願い

私たちも、生活の中、人生の中のとげは、本当取り去ってもらいたいものです。みなさんに、取り去ってもらいたいと願っているもの、そうやって主に祈っているもの、ありますね？病気は、その筆頭です。身体の障害もそうでしょう。また、職場における、嫌な人とか！

2C 聞かれない願い

しかし、三度祈っても聞かれません。聖書では、三度は、日本語の言い回しの意味と似た意味を持っています。「三度目の正直」という言い回しがありますね。三度によって、事実であると確認するような意味合いがあります。それは、確かにそのとおりであると確認するのです。パウロは、三度祈りましたが、その祈りが聞かれなかったのです。主は、この祈りは聞いて下さらないのだということ、パウロは確認したのです。

けれども、いかがでしょうか、同じように三度祈られたけれども、祈りが届けられなかった祈りがあります。そうです、ゲッセマネの園での祈りです。「マタ 26:39 それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」杯について、ご自身から過ぎ去らせてくださいと祈られました。これを、一度ならず二度、そして三度祈られました。しかし、イエス様は、その願いが、父の願われることとは違うかもしれないということも、お語りになっています。はたして、それは父のみこころではなく、父なる神はイエス様が杯を飲まれることを願われていたことを、三度の祈りによって確認されたのです。

2A 十分な恵み 9

1B 聞かれている祈り

しかし、主が願いを聞かれないということで、それが、自分の神の恵みと憐れみが与えられていないということではないのです。むしろ、すでに神の恵みが、今の状況の中で与えられていて、それに気づかずに、あたかも、神の恵みには限りがあると思ってしまうことがあります。

こんな笑えないたとえ話がありますね。洪水が来て、家の屋上に這い上がり、主が救ってくださることを待っていました。自衛隊の飛行機が来て、ロープが降ろされるも、「私は神が救ってくださることを祈り、その祈りを聞いてくださるのを待っているのです。」と断ります。そして、今度は救援隊がゴムボートで助けに来ました。けれども、「私は神が救ってくださることを祈り、その祈りを聞いてくださるのを待っているのです。」と、また言います。それで水かさが増していき、ついに

おぼれ死んでしまいました。天国に行って、神さまに文句に行きました。なんで、祈りを聞いてく
ださらないのか？と。神は答えられます、「もう聞いていたのだが。」神の恵みは十分にあり、それは
自衛隊のヘリコプター、救援隊のゴムボートを神は送ってくださっていました。

私たちが願っているようには、主は聞いて下さらないことがあります、実は祈りを聞いてく
ださっているのです。9節を読みましょう。

2B 主の恵み

⁹しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるか
らである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで
自分の弱さを誇りましょう。

1C 主の好意

主はパウロに、答えてくださいました。「わたしの恵みはあなたに十分である。」と。パウロは、こ
の肉体のとげがあるとうことは、神の恵みを十分に受けていないのではないかと疑ってしまった
かもしれません。けれども、十分にあったのです。主の恵みは尽きることがありません。イエス様
について、使徒ヨハネは言いました。「1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、
恵みの上にさらに恵みを受けた。」預言者エレミヤも、廃墟となったエルサレムを見て、嘆き悲しん
でいたのですが、今、それでも、このようにして生きていくと気づきました。それで、哀歌の中でこ
う言っています。「3:21-23 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。22
【主】の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。23 それは
朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。」苦しみの中でも、痛みの中でも、そして弱さの中
でも、主の恵みは十分にあるのです。

2C 人のへりくだり

そしてパウロは、「わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言いました。パウロに
対して、サタンが使いが肉体のとげを与えるのを、主が許されたのは、「高慢にならないように」と
いうことです。パウロは、第三の天に上げられました。天国を彼は見てしまったのです。そのあまり
ものすばらしさに、彼は言葉を失いました。しかし、そこで霊的な高慢に陥りかねません。かつて、
サタンが、自分が神のそばにいた天使だったので、高慢になり、神のようになると思いあがり、そ
れで引き落とされました。パウロに、肉体のとげの弱さが与えられたのは、彼が、へりくだるため
であり、そのへりくだりに、神の恵みが十分に働くからです。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだ
る者には恵みを与える。(ヤコブ 4:6)」

私の覚えているのは、アメリカから戻って来ての数年間です。アメリカで多くのことを学びました。
それで日本の教会を見ました。違ったことをやっているの、批判的でした。けれども、自分自身

が初めて、いかに大変であるかを知りました。それで、日本で福音宣教のために働く、すべての牧師と宣教師を尊敬するようになりました。神の召しがあれば、決して、この地に留まることはできないことを知ったからです。自分の働きが弱められていったからこそ、その真理を知ったのです。もし、そのまま習ったことがうまく行っていたら、高慢になっていたことでしょう。

3B 弱さの内の完全な力

そして、「**わたしの力は弱さのうちに完全に現れる**」と、主は言われます。

1C 自分の無力

弱さがあるからこそ、その力が神から来ていることを知ることができます。自分が弱い時にこそ、私たちは神に拠り頼もうとします。もし、自分に力があると思ったら、自分に拠り頼みますね。そして、大きな失敗をするのです。ペテロがそうでした。自分の力でイエス様に従えると思いました。死ぬまで一緒にいると豪語しました。けれども、彼は三度、イエス様を知らないと言いました。うちのめされました。

2C 神の力

けれども、だからこそ、ペテロは、その弱さの中に神の力が完全に現れることができたのです。ペテロがペテロの力で、神の力の現れを邪魔することがなくなったのです。使徒の働きにある、ペテロの行った不思議やしるしは、彼が、自分の肉がいかに弱いのか、その打ちのめされたところに立脚しています。弱さの中に、神の力ありなのです。

4B 弱さの誇り

だから、キリスト者は最もへりくだったことができるのです。「**ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。**」ということです。ある人が、このように言いました。キリスト者は、何かに頼っているから弱虫だと思われる。しかし、キリスト者ほど、勇気ある人たちはいない。それは自分の弱さを認めるという勇気だ、ということです。そうすれば、キリストの力が、その弱さに完全に働くのを見ることができるからです。

ニューヨーク大学リハビリテーション研究所の壁に
残された患者の詩(作者不詳)

大きなことを成し遂げるために
力を与えてほしいと神に求めたのに
謙遜を学ぶようにと
弱さを授かった

偉大なことができるように
健康を求めたのに
よりよきことをするようにと
病気を賜った

幸せになろうとして
富を求めたのに
懸命であるようにと
貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして
成功を求めたのに
得意にならないようにと
失敗を授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意に添わぬ者であるにもかかわらず
心の中の言い表せない祈りは
すべて叶えられた
私は最も豊かに祝福されたのだ